

1、レポート

今年度の 1 3 分科会「道徳教育」の実践報告は以下の 3 本のレポートでした。

小学 1 年 道徳「こころはっぱ」の実践	伊藤 弘喜	宗谷教職員組合
心に訴える道徳の授業を目指して ～主観的に訴えてはダメですか？～	小菅 正勝	檜山教職員組合
何を伝える？何が伝わる？	大竹 宏周	空知教組

2、レポートの概要と交流

(1)「小学 1 年 道徳『こころはっぱ』の実践」(伊藤弘喜・宗谷教職員組合)

校内研究授業での実践レポートを報告。小学校第 1 学年の授業の様子や学校・地域の状況も報告。

教材『こころはっぱ』は「友達と進んで関わり、なかよくしようとする心情を育てる。(B-10 友情、信頼)」を主題に、さみしそうにしているいのしし君が動物たちから声を掛けてもらって、木の葉の色が緑→青→虹色に変化していく内容。登場人物のいのししの心情を考え、児童が役割演技をしながら主題に迫る授業の報告を協議した。

参加者からの意見では、相手の気持ちを考えたり、声を掛けたりできるのは発達的に何歳頃ということも話題にのぼる。島である学校の子どもたちの人間関係から、幼いころから仲良しであるため、いのししの様な立場で考えることも大切だという意見もあった。また、参加者からは校内の校長のコメントから、随分管理的な言い方だという感想も出てきた。共同研究者の山田先生は、自他の批判は発達的に 15 歳からでないとできないことが紹介された。自律的に行動することができるようになるためには小学校段階からの経験が必要で、小学校では、道徳の授業も含め、こんな考えやあんな考えなど、いろいろな考えを残していく時期だという。けんかした時などは、道徳の授業をする前と授業をした後で、なかよくしようとする心情に対してどんな違いがあるのかななどを自覚化していくのも重要とコメントしていただいた。

(2)「心に訴える道徳の授業を目指して ～主観的に訴えてはダメですか？～」

(小菅 正勝・檜山教職員組合)

中学校 2 学年の生徒に、実践者の子どもの頃の生活体験を道徳の資料に「友情」の授業をした実践を報告。授業のはじめに「友情」を自分なりに別の言葉に置き換えたらどんな言葉になりますかと聞き、「闇」(ときにはくずれて最悪な関係になることもあるから)、「うらぎり」(友達と違って言っても、うらぎったりするから、人間だから)などの言葉があがる。次に、資料『あだ名』という実践者の少年時代の陽一くんという友達とのエピソードを読み聞かせをして、生徒に感想を考えさせ書いてもらう。「お互いがお互いを信頼し合っていないと友情

は成り立たないことが改めて分かった」「厚い友情は信頼感があって・・・」「友情はただの言葉だと思っていたけど、人との信頼関係の上であるものだと思った」などのほか、こんな意見も。「陽一くんは小菅先生への友情がとても強くて、それだけを見たら友情はいいものだけど、客観的に見てみると、陽一くんは小菅先生への友情が強すぎるせいで、違う子を傷つけているから、友情ってやっぱりきれいなだけじゃないんだな、と思った。友情を大事にするのか人を傷つけないことを大事にするのかはちゃんと考えて、場合に合わせられればいいと思った。」

「友情は人によって変わる。そいつとの友情は、どれくらいのものなのか、というのは変わる。例えば、軽い友情、重い友情、普通くらいの友情、があると思う。先生のは、おれの思うなかでは重い友情だと思う。」なども出てきた。授業後には『「友情=人と人」との関係って、そんなに捨てたもんじゃなくて、いいものだよ』となど、授業前の生徒の考えが変容し、自分なりに考えて書いたという報告。

参加者の交流では、資料の実話は入り込む力があって、この生徒たちに一石を投じたい、そんな授業だ。目の前の子が置いてけぼりの道徳の授業がなりがちな課題がある中、押しつけではなく「共感する」ものがあつたのではという意見がありました。共同研究者の山田先生からは、「友情」を子どもたちから出させておいて、授業が終わってから友情の多様な考えを定義し合う。授業前の「友情＝関」の生徒も改めて友情を発見させる授業ではなかったか。現在、授業者の先生方は、自分の経験を語らず『無名の先生』になっている。怖がり過ぎている先生。AI化になっても、人間同士の中で、先生の経験・人生に出会えたなど、先生にもこんな経験があつたことを題材に子どもたちとの関係性を作り上げた実践だともいえる。押し付けの授業ではなく、寛容さ謙虚が見られたからこそ、主題に沿って子どもも変容していたのではないか。

(3)「何を伝える？何が伝わる？」(大竹 宏周・空知教組)

2020年度の実践を含め、道徳に関する思いを問題提起した報告であった。

今年度に転勤した義務教育学校。ある日子どもたちが「次の時間道徳か・・・↓」と言っていた。前任校では子どもからそんな言葉を聞いたことはなく、「道徳が楽しい」という言葉は聞いたことはあっても落胆するような言葉は聞いたことがなかった。教科書が導入されたとき、日頃の忙しさから「教科書を使い、指導書通りの授業をする先生はどんどん増えてくるだろう。」と懸念した。それが今、目の前にある。そういう授業で子どもたちに何が伝わるのだろうか。子どもたちに何を伝えることができるのだろうか。確かに現場は忙しい。早く帰りたいと思う。教科書の価値項目はこなさないといけないと考えると余計窮屈だ。でも子どもたちに何かをわからないが伝えたいと思う気持ちは持っている。「教科書通り、指導書通りおこなえばちゃんと伝わるのか?」「僕の考えた実践でもちゃんと伝

わっているのか？」同じことなら苦労しない方がいいのではないか。という報告。

参加者からは、自主教材を作成する時間はどれくらいかという質問が出てきた。また、地域教材として、郷土について調べたことや地域の行事への参加体験等に基づいた話合いを通して、郷土に対する認識を深めた実践の話題について、そのねらいや授業での子どもの様子に交流が集中した。特に、なぜ赤平市にアイヌの伝統工芸品が展示されているのだろうかという地域の教材を提供しようとした実践者の思いも交流できた。共同研究者の山田先生からは、授業づくりの先生方の3つの問題点が提起された。一つは、「先生に考えない・考えをもたせない」ような政策があること。二つ目に、忙しすぎること。現場のハード面の課題。三つ目に、教科書通りにしないと責任を負えない問題。保護者からクレームが来た時には戸惑ってしまう場合もある。道徳の授業で何を伝え、何を考えさせたいのかを改めて考えることができた。

3. ZOOM 開催でのあり方について

昨年度は開催できなかった13分科会『道徳教育』もZOOM開催で、実践レポートをもとに深い論議ができた。来年度は、高校も公共の教科書をもとに道徳教育の内容を論議できるのではないかと考える。

4. 参加者名簿

		名前	所属	出欠
1	共同研究者	山田 真由美	教育大札幌校講師	○
2	司会者	中村 哲也	幌加内町朱鞠内小学校	○
3	司会者	遠藤 玄	宗谷教組専従	○
4	レポーター1	伊藤 弘喜	道教組	○小学1年
5	レポーター2	小菅 正勝	道教組	○中学校2学年
6	レポーター2	大竹 宏周	道教組	○中学校実践
7	参加者	宮崎 千鶴	高校・大学生	○大学生
8	参加者	北村 公一	一般市民	○退職者
9	参加者	戸川 貴之	その他	○帯広高等学校
	共同研究者	谷 光	北海道子どもセンター	不参加
	共同研究者	塚本 智宏	東海大学札幌校舎	×
	参加者	及川 航	道教組	×